



本は知識の根本（その5）

校長 佐々木 秀之

「霜降」を過ぎ、秋も酣、抜けるような青空の日が続いています。芸術の秋、読書の秋、勉学の秋、食欲の秋、スポーツの秋と例えられるように、じっくり物事に取り組んだり、習得したりするのによい季節となり、紅葉の便りが各地から寄せられるようになりました。

さて、文化の日を中心として2週間（10月27日から11月9日まで）は「読書週間」です。本校も10月2日から27日までを「読書月間」として全校で読書に取り組みました。

＊

子供たちが本を読むと、「集中力が養われる」とか、「人の気持ちを理解できるようになる」「言語能力が身に付く」などと言われます。大人にとっては、「仕事に役立つ情報や知識を得られる」「教養や知識が身に付く」「ストレス解消になる」「コミュニケーション力が高まる」「語彙力、文章力が養われる」「想像力が豊かになる」などなど……。よいことがたくさん浮かんできます。

以前、Walt Disney（ウォルト・ディズニー）は「宝島の海賊たちが盗んだ財宝よりも、本には多くの宝が眠っている。そして、何よりも、宝を毎日味わうことができるのだ」という言葉を残していることを紹介しましたが、次の言葉も残しています。「物語であれ、記事であれ、本であれ、それらを読むには、タイミングが大切なのだ。自分の年齢や理解力から考えて、難しすぎる本を無理やり読もうとすると嫌になってしまい、そればかりか、それ以降本を避けるようになり、本の持っている素晴らしさを否定するようになる。」

一般に、低学年は「初歩読書期」で、最初は速度が遅いものの、読む習慣が付いてくるにしたがって新しい言葉も推測しながら文意を学んでいき、自分の考えと比較しながら読むといった創造的な読み方ができるようになると言われています。中・高学年は「多読期」で、何でも読むうちに理解と記憶がよくなっていき、必要に応じて読むものを適切に選べるようになると言われています。

国語の教科書の最後には「本の世界を広げよう」というページがあり、その学年の発達段階にあった推薦図書が載っています。文字の大きさや量も子供たちにちょうどよい本ばかりです。

＊

今年の「読書週間」の標語は「私のペースでしおりは進む」です。読書は子供が言葉を学び、感性を磨き、表現力を高め、創造力を豊かなものにし、人生をよりよく生きる上で欠くことのできないものです。本を大いに楽しみ、子供たちに読書習慣が確立することを願っています。



<本年度の学習発表会について>

年度当初にお配りした年間予定では、1月27日に学習発表会を行うこととしていましたが、今年度は音楽発表会を開催することといたします。文部科学省は、学校行事について精選・重点化、準備の簡素化・省力化をするように提言しています。ご理解・ご協力の程、お願いいたします。